

緑のまきば

2025年 No.58

小金井緑町教会

小金井市緑町四・一六・三三

TEL 042・381・7961

牧師 山畑 謙

説教

2025年度の聖句

『我汝らを選び』 山畑 謙

「あなたがたがわたしを選んだのではない
わたしがあなたがたを選んだ。」

(ヨハネによる福音書15章16節)

高田郁（かおる）という時代劇作家のデビュー作に『出世花』という作品があります。主人公の娘は武士の娘でしたが、母が男と出奔（しゅっぱん）し、その二人を討つべく父に連れられて旅に出ました。しかし遂に行き倒れになってしまい、父は事切れ、瀕死の娘は危うく寺の住職に保護されました。その寺は死者を火葬して弔いをする「墓寺（はかでら）」と呼ばれる寺でした。父の痩せ衰え、無念にゆがむ顔の亡骸（なきがら）は、若き僧侶と寺男たちによって『湯灌（ゆかん）』を受けたのでした。大きな盥（たらい）に水と湯を張り、亡骸がその中で丁寧に洗い清められ、剃髪（ていはつ）され、死装束（しにしようぞく）を着せられ、

棺桶に納められていきます。父は安らかな表情になって、茶毘（だび）に付されました。その寺で世話になるうちに、娘は『湯灌』が現世の苦しみを洗い流し、来世への生まれ変わりを願う大切な儀式だと知らされ、やがて「三昧聖（さんまいひじり）」という肩書をもらって湯灌の働きをするようになります。汚れと痛みや苦しみや悲しみにゆがんだ顔や体が清められ、手当てを受けて、女性化粧もして、安らかに清らかに旅立って行けるように手をかす仕事でした。女郎のように現世のどん底にある辛苦をなめた人も、三昧聖の湯灌を受けければ、美しく安んじてあの世に行けると評判になるのです。

地上の辛苦、それは亡骸にまで染みつくようでありながら、湯灌によって洗い流すというのが、私にはとても新鮮なものでした。確かに死ぬまでつきまとう、人の、世の縄目を思わされます。仏教の立場での湯灌の大切さを思いつつ、私たちは死んで亡骸となってからではなく、造り主なる神さまが、生きているうちに、まったく「洗い」を与えて下さると聖書から教えられます。私たちの罪の汚れを洗い清め、罪の縄目から解き放つために、神の御子イエス・キリストが遣わされました。それがクリスマスの出来事です。そして十字架に流される血潮は「贖い（あがなひ）」と言って、私たちの身代わりになって罪の罰を受けて流される血潮でした。グロテスクに聞こえるかもしれませんが、教会では、罪がそのようにキリストの代償をもって赦されるのを、キリストの血によって清められると言ったりします。

主イエスは、すべての人がその救いに与る（古めかしい言い方ですが「あずかる」と言います）よう、弟子たちにすべての人に「洗礼」を授けるよう命じられました。改めて、洗礼を受けるとは、まったく罪を洗い清められる事です。洗われるとは、すべての罪を赦され、罪の縄目から解放される事です。そしてただ赦されて終わりではなく、「神の子」として永遠の命に新しく生かされる出来事が「洗礼」です。洗礼を受けた後も罪を犯してしまいますが、復活し今も生きていたもう主イエスが、「それでもお前は赦されている」と告げて下さいます。

主イエスは、最後の晩餐の席で、弟子たちに「わたしがあなた方を選んだのだ」と仰せになりました。主の選びとは、十字架の「洗い」を受ける者として選ばれたのだという事です。今も生ける復活された主イエスが、十字架による「洗い」を受けるべく「わたしがあなたを選んだ」と私たちに呼びかけてこられます。洗われ神の子として天の御国を目指して生きるべく「選び」があなたにもあると。

私たちの人生において、自分が選んだのだと思っている時には、それなりの自信があつての事です。思うようにならないと行き詰まってしまう。選ばれ、洗われ、新しく生かされていると信ずる人生の道は、死の壁を打ち破って天の御国まで続くものです。選ばれる幸いを素直に頂戴して、一緒に歩んで行きませんか。